

醬油仏

吉川英治

青空文庫

「命がけだつて食えねえ」

「なに食える」

「食えねえ」

と、食い意地の張つた話から、果ては、賭食かけぐいのことで唾つばを飛ばし合っている様子だつた。

すると、三公が言い出した。

「おれの国にや、蜜柑みかんを一箱、食えるか、食えるもんか、賭かけをした奴があつたつけ」

「蜜柑の一箱ぐらいなら、おれだつて、今すぐ此処で食つて見せる」

「皮も箱も縄も、きれいに食つてしまふんだぜ」

「そ、そいつあ、無茶だ、賭にならねえ」

「ところが、食うと言つて勝つた奴があるから妙だろう。その代り条件があつた、どうして食つてもいいという条件があつたんだ」

「へえ、でも、食つてしまったのかい」

「蜜柑の実を食う前に、皮と縄と箱を焼いて、灰を団子だんごにしてペロリとやってしまった。食われた方の奴は、五両賭をしたんで、世帯をつぶしてしまやがツた」

三公の話が終ると、丑うしが待つていたように口を尖とがらして、

「——だもの、この番附だつて、嘘とは言えねえぜ」と威張りだした。

仲間外はずれになつて寝ていた左次郎は、何かと思つて、亀首かめくびを擡もたげてみると、丑がみんなの前に皺しわをのぼして見せつけているのは、乾物袋になつていた番附の切れっ端「御世泰平鼓腹御免、大江戸大食番附」

という反古ほごだつた。

二

近年、柳橋の万八や中洲の芝清しばせいなどで、賭食かけぐいではないが、大食競べの催しが度々あつた。

一方では黒船を打払え、佐幕がどうの、勤王方が旗上げするのと、騒いでいるから、御禁制の布令ふれが出てても出ても、岡場所かに隠し売女ばいたは減らないし、富興行は密ひそかに流行はやるし、万年青狂おもといはふえるし、強請ゆすりや詐欺かたりは横行するし、猥画わいが淫本いんほんは相変らず秘密に版行されて盛んに売れるという世の中。

そんな江戸の時世でいながら、銅鑼どろかめさんの部屋にいる日傭ひようとり取などは、食う話ばかりしていて、筆食たんしこしゅう壺漿たししゅうにたんのうしたことなどは夢にもない。

だから番附に勘亭で刷つてある「御世泰平鼓腹御免」なんていう文字をみると、躍しやく起やくになつて、癩しやくにさわつてこんな番附が当てるなるもんけえ——と言いたくなる。

だが、奇矯ききょうじん人の大食会が流行の因をなして、この手輩てあいの仲間にも、この頃の賭食かけぐは一つの流行はやりものになつているので、その反古に書いてある、筆頭連中の名は偉なる英雄のごとく見えて、のし餅十枚に煮小豆にあずき二升を平げた大関や、大沢庵十六本以上とか齧かじつてみせた小結の肩書には、自ら敬意を表したくなつてしまつた。

そのなかで、ひとり土俵死という印のついた名があつた。

「おや、こいつあ、たつた醤油を七合飲んで死んでやがる」

三公が、そのはかなき名を見つけ出して笑ひこけると、年長としかきの由造が、尤もらしく首を振つて、

「うんにや、醤油しやうゆを七合飲んだのは偉い」

「どうして偉い？ 七合くらい、酒だと思つて飲みやあ」

「ばかを言え、酒とちがつて、四合も飲みや眼くらが眩くらんでしまつて、カーツと逆上あがると何が

何だかわからなくなる。俺も一度醤油賭をして、二合五勺まで飲んだが鼻血が出ちまってあとの二合が飲めなかった。それを七合も飲みやあ死ぬのは当りめえだ。第一他のものならいいが醤油を飲ませた行司が物の分らねえ奴だ」

「そうかなあ」

と、一同は由の該博がいほくに感心した。ところが感心しない者がひとりいた。割合にむつつりな六である。

「だつてお前、おれが一度仕事に行った浜町の砂利場にや、平気で一升賭がけをする奴があるぜ」

「醤油をか？」

「そうよ、一升賭をしちや、きつとペロリとやって、そいつに勝たれてしまうんで、誰でも相手にしねえつていうくらい、評判になつてゐる男があるんだ」

「おかしいな、それで生きてるかい」

「何ともありやしねえ、毎日砂利場か、深川の佐賀町河岸へ荷揚げに出て来るから確かなものさ」

「嘘だろう、どう考えても、醤油を一升も飲みや死ぬ筈だ」

「だつて、現在、生き証拠があるんだから為様しやうがあるめえ。嘘だと思つたら今度行つて、賭をやつてみるさ」

「よしきつとやつてやる。なんてえ男だ、そいつあ？」

「佐賀町で、醤油賭の伝公といや、知らない者はない。だが伝公は小さい勝負じや、首を振るぜ」

「一朱か二朱か」

「何しろ、その帳場にいる者が、十五人二十人と組んで二両とか三両とか東になつて纏まとめなくつちや、どうしてもやろうと言わねえそうだ」

「そんな事を大きな口を叩いて、もし伝公が負けたらどうするんだ。まさか水揚人足や砂利場の軽子かるこ稼かせぎで、一人で二両三両という金は出せまい」

「ところが、その伝公つて奴は、なかなか金を持つてるんだとよ」

「ふーむ……」

「だから誰も、ツイ追目になつて、引ツ懸るんだというから面白いや」

「ひどい野郎だな」

みんなが笑うのに釣つりこ込まれて、左次郎もウツカリ蒲団の中でクスクス笑つた。

「おや、いたのかおめえ」

「はい」

「いい若い者のくせにして、物臭え男だな。雨が霽あがったから明日は仕事にありつけら、元気を出せよ、元気を」

「どうも、しばらく休んだせいかな、体が痛くって……」

と左次郎はまた、油気のない前髪まへかみの頭を見せただけで、夜具の中へ丸まってしまう。

「左次さん」——そこへ、大坂格子の向うで、銅鑼どら龜かめのお内儀かみさんの声がして、

「親方が呼んでるよ、ちよつと奥へ来て貰もらいたいって」

三

「お前さん、お武家の息子だね」

銅鑼屋どらやの龜かめさんの前に坐ると、いきなりこう云われたので、左次郎はまごついた様子だった。

「そう見えましようか」

「見えるな」

と、銅鑼龜はそこで一服喫つて、質草を包んでいる女房の出かけてゆくのを待つていた。親方の米櫃こめびつも空だからとみえる。——左次郎はそんなことを考えながら、銅鑼という通称をとつた彼の菊花石あばたを眺めていた。

「失礼だがお前さん、何か、敵討でも望んでいる身の上じゃないのか」

急に声をひそめられて、左次郎はいよいよ慌あわてながら、

「飛んでもない、決して、左様な者じゃございません」

「だが、お侍のお伴だろうか？」

「はい、そりゃあ」

「幾つ？ お年は」

「十九でございます」

「その青白い蒲柳きやしやな体で、日傭取稼ひようとりかせぎはこてえましよう。うちの部屋へ来てまだ二月くらいだろうが、たとえ二月の間にしろ、よく働いたもんだと感心する。またその辛抱は、何か希望のぞみがなければ出来ない芸だとおれは思うが……」

左次郎は畳のチリをむしっていた。

垢のついた仕事着にちよつ切帯きりおび、身なりはひどいが、襟元の奥が肌白く見えて、この寄子部屋よりこではどうしても掃溜はきだめに鶴。

「ほかの事情ならなおのこと、打明けても差しつかえあるまい。ろくな力にもならない癖に、江戸の人間の悪い性分で……どうも聞かずにいられない」

「では親方、ほかの者には、内緒にしておいて下さいまし」

「だれが、他人ひとになんぞ話すもんか」

「実は少し、尋ね物があつて、殿様からお暇を戴いて来た体でございます」

「それ見ねえ、おれの眼は、やつぱり違つていなかったのだ。して国元はどちらだね」

「鳥取の池田家に仕えます者で、はい、因州です。父は納戸方なんどかたで七十石ほど頂戴しておりましたが、先頃死亡いたして、家名もそのまま潰れつぶかかっているような次第で」

「意気地のねえ話じゃないか、お前さんに跡目ついでが嗣げないのか」

「でもございませませんが、実は、私の養母お咲と申す者が、六年程前に仲間ちゅうげんひとりひとりを連れて上方かみがたへ出しましたまま、とうとう帰宅いたしません。——ところがその節、同藩の重役から二百金の金を預かりまして、烏丸からすまの某家から譲り受ける約束をした元げん贄びん焼やきの花は瓶ないけ、安南あんなん絵の壺えんを受け取つて来てもらいたいの事で、ついでに、頼まれて出立いた

しました」

「なるほど」

「然るに、養母のお咲も、同行した仲間の一平という者も、そのまま鳥取へ立ち帰りませんのみか、頼りも沙汰もなく、足かけ六年打過ぎてしまいました。当惑したのは、貧困な父でした」

「そうだろうとも」

「おまけに生来病弱であつたため、それを苦患くげんにして、幾分天寿てんじゆを早めたかと思われま
す」

「で、その金の方も、安南絵の壺とかも、いまだに話のかたがつかねえという理由わけかい」
「一方の方は父の上役ゆえ、きびしい御催促もなさいませんが、何せい、家中ではとく
な評判が立つてしまい、また、元贄げんびんの安南絵の壺も、前に一度殿様のお耳に入れてあつ
てぜひ見たいという仰せのあつた品物ゆえ、今さら、養母がそれを持たずに手ぶらでは帰
れぬ事になつております」

「ふーむ、成程、厄介な筋だな。それじゃお前さんも、安閑あんかんと跡目願いも出されまい」

「まったく、私も、実に困つてしまいました。実の母なら気心も分りましようが、何しろ、

十二、三の時に、たった二年程しか、一緒にいなかった養母ははなんで」

「家中の評判っていうのは、どんな事を言い立てているのか、お前さんも小耳に挟んでいなさるだろうが」

「それが……」と、左次郎は急に口籠くちごもつて、赤らめた顔を俯向けながら、

「お咲殿は帰るわけではない、以前から、仲間の一平とは主従以上に親しかつたから——という風に申します。父の病体も永年のことゆえ、そんな噂が立つのも道理かと思われませう」

「ウム、ウム、大きに」

と、銅鑼龜親方の世事に馴れた考えも、それと一致したもののか、二つばかり頷いた。

「で、左次さんが、国元を出て来たのは」

「何でも、この江戸表にいるという噂があるもんですから」

「男女ふたりが？」

「左様でございます」

「しかし、六年も過たつて、尋ね出したところで、安南絵の壺を持歩いているわけもなからうし、金もねえと来たひには、どうにもならない話だろうぜ」

「武士つてうるさいものでして、家中の者たちは、左次郎も十九になれば、父の怨みを晴

らすだろうとか、不徳な養母をあのままにして置く法はないなどと申します。また、縁類の者は、所詮、二百金の太刀を御返却することは出来ぬし、また殿様のお耳にも入っている品物の事だろう。その壺を手に入れる法がなければ、せめて、仲間の一平の首だけでも持つて鳥取へ帰ってくれと、こう因果をふくめられました。——で江戸へ出て参りましたが、もう路銀も尽きました上に、養母のお咲と一平が、どこに暮しているものか、皆目、見当はつきませず、途方に暮れた末親方の部屋でお世話になるようなことになりました」

「そうか、じゃ二百両もする安南絵の壺よりも、その一平という奴の首を探して帰った方が、侍らしいし、第一、無償だから手に入れ易いというものだ」

「ところが生憎あいにくなんです」

「何が生憎だ」

「父が弱かったせいとか、私も御覽の通りな虚弱でして、所詮しよせん、左様なことが出来るかどうか、心配に堪えませぬので」

「おいおい左次さん、七十石の小祿でも、侍の息子じゃねえか。しつかりおしよしつかり。体が弱いと思つたら、日傭を稼いでいるうちに、ウンと天秤棒てんびんぼうで鍛きたえておくさ。相手が腕利きの浪人とか何とかじゃ、少し困るが、なアに、おめえ、もと仲間している男だつて

いうなら、どんな頑丈だつて多寡たかのしれたものだ。居所たかの分つたときは、俺も腕をかしてやる」

銅鑼屋の亀さんは乗り気になつた。

梅雨も霽あがりそうなので、明日の仕事を見越し、質屋から歸つて来た内儀さんに、酒を買わせた。

湿気払いを飲んで、羅漢らかんの雑魚寝ざごねのように高たかい軒びきになつた寄子部屋の隅つこで、左次郎だけはマジマジと眼をあいていた。

そして、寝入つたかと思うと、何かしきりに、嚙うわごと語を言つていた。

四

部屋で一番元気者の三公が悄しおれていた。

毎日、稼いせぎに出ていながら、湯にも行かず鮓すしの立食いにも出かけず、粉煙草をハタいて、鬱ふさぎこんでいる。

「おい、どうしたい」

丑うしや由造が訊くと、とうとう白状した。

「実はやられちまつたんだ」

「やられたって、何をよ」

「伝公と醬油賭をして、この間の前借をみんなアツパツパにしてしまった」

「こん畜生」

背中をどやしつけて――

「人に黙って、抜け駆けをしようとするから、そんな目に遭あやがるんだ。ざま見やがれ」

と、笑って、兄弟分のために、奉加帳ほうがちようを廻した。

それで、当座の煙草銭が出来たので、三公はすっかり元気が恢復して、太平楽にその晩、寝物語でこう話した。

「一昨日おととい、深川の帳場で、例の伝公と一緒にになった。止よしあいいのに昼休みに、オイ伝公、一升五合飲むなら二両賭をしてやろうと言ひ出しゃアがった。すると伝の野郎フンていうような面つらして、一升五合なら五両賭でなくつちや嫌だと吐ぬかしやがる。そこで、一升三合で折れ合つて、始まることは始まったが、二両と来ちや大金なんで、此方組こつちぐみが頭数が足らなくなつた。そこで、おれもツイ誘い込まれたという理わけさ」

「そしてどうしたい、伝公は」

「いつもより三合も多い醤油を井どんぶりに入れて、ツウときれいに吸ってしまつて、今日は二両の日当になつたから、左様なら——とか何とか、涼しい事を吐ぬかして、半日で帰つてしまつた」

「忌いまいま々しい野郎だな」

「聞いただけでも忌々しいだろう。だもの、おれの身になつてくれ、口惜しくつて、寝つかねえ」

「もう止せよ、これに懲こりて」

「意地だ、こんだあ一升五合賭をやつて、あいつに血へどを吐かしてやらなくツちや虫が納まらねえ」

「だが、不思議だなあ」

もう寝たのかと思つていた由造が、突然、尻うな尾の方で唸うなつていた。

「勝ち負けはとにかく、それで生きてるっていうのが余つ程不思議だよ、何しろそいつは、ただの人間じゃねえぜ」

それ以来左次郎は、醤油賭の話ばかり耳にしていた。で、方々へ仕事に出る度に、それ

となく伝公の姿を物色する程になつていたが、まだ、一度も見かけたことはない。

浜町の砂利場へ廻されて来た日だった。

ここの仕事は荒つぽいので、日傭ひやといでも肩肉の盛り上がつてるのが揃っている。

で、常に仕事先を庇かばつている亀親方が、左次郎だけは、わざとここへ廻さないようにしていたが、ほかの出先が途切れたので、しばらく辛抱してくれという話だった。

二の丸のお城普請ふしんへ行く玉川砂利をこの河岸で上げる。

小普請の役人が、床几しょうぎに掛つて見張つていた。

砂利場使いのパイスケ二百本串ぐしが一人前の仕事。舟から河岸へ一荷ごごとに担いでゆく度、小頭から竹籠たけべら一本ずつ渡されて、それが夕方の勘定高になる。

体のいいのは一人半も串数を稼ぐ。

腕うでつききという帳場だから、みんなわき目もふらない。

汗をダクダクしぼつて、砂利の音、足どり、掛声、すべて一種の調子に乗ってくる。

「どじ奴め！ 何をしてやがるツ」

陸おかの砂利山で、突然荒つぽい声が出た。

「なんだ此奴は、さつきから人の鼻ツ先にヒョロヒョロしてやがって、後つかが問つかえてしよう

がねえ」

「どうも済みません、不馴れなものですから」

左次郎は鼻で息をしながら、青白くなっていた。

「ばか！ 馴れねえと承知していたら、こんな帳場へ臆面もなく稼ぎに来るな。どこの馬の骨だ、てめえ」

「銅鑼屋の亀さんの家におります」

「銅鑼屋の部屋にも、てめえのような意気地なしがいるのか。明日は、米の飯を食つてくるんだぞ」

朝の二ふたとぎ刻ばかりで、すツかり肩の皮が剥むけ、ヒリヒリと熱をもつて来た。かれは、汗をふくようにみせて、始終涙をこすっていた。

充分気をつけていたつもりだが、何しろ、二刻もつづく、腰の骨が持ち耐えられなくなつて、また誰かの足元へ、ドサツと、天てんびん秤を落してしまった。

ハツと思うと、途端に、

「ヒョがえる口蛙め！」

と、左次郎は、砂利場の柵ますから下へ蹴飛ばされていった。

するとそれを見た一人の男が、左次郎を蹴って行った軽子のうしろへ呶鳴りつけた。

「やい！ やい！ 大人気もねえ真似をするないツ。前髪じゃねえか。少しや庇ってやるもんだよ」

男もやはり砂利場の仲間だった。

腰をさすって、ぼんやりしている左次郎の側へよって来て、

「おい前髪の兄あちゃん。おれが介添えしてやるから、気をおとさずに稼ぎねえ。それにパイスケの縄をこう詰めてしまうから余計に足の調子が取れやしねえ、どれ、直してやるから持つておいで」

と、自分の天秤を肩から投げた。

五

男は親切に、それから絶えず左次郎のうしろに尾ついた。

天秤を前寄りに肩へ当てて、後荷の縄の一端をうしろの男に持って貰ったから、左次郎は前よりも楽になり、足の調子もよくとれた。

「お蔭で、今度は楽になりました」

昼飯の時、そばへ寄って、改めて、礼をのべると、

「まだ、そんな肩をしていちや、砂利場の仕事は無理だからな」

と、男は三人前もある弁当箱を抱えて、うまそうに頬張っていた。

弁当箱も大きい、男の恰幅かつぶくもすばらしい筋肉で出来上っていた。硬かたじま緊りに肥えて、

骨太で、上背丈うわぜいがある。年頃は三十二、三という見当。

左次郎は、この男のザラザラした毛脛けすねも、日に焦けた皮膚も光る目も、すべて親切気に

富んだ特質のように見えて、一ぺんに頼もしくなった。

なお、話しているうちに、どこか因州いんしゅうなまり訛のある男のことばも、一層、この境遇と

他郷にあるかれの心に、ある慕わしさを起させた。

ふと、吸っている煙草入れを見ると、それも鳥取の古市ふるいちで名産としている漆革細うるしかわざい

工なので、

「もしも、貴方は鳥取じゃありませんか」

男は、砂利の中へ落していた火玉を煙管きせるで掻き分けていたが、ひよいと、横に顔を上げ

て――

「なぜ？」

「でも、古市の漆革を持っておいでですから」

「ウ、これか……」と、煙草入れを見直して、

「こりや、四、五年前に、誰かの土産みやげに貰ったのよ。……するとおめえは鳥取かい？」

「いいえ」

左次郎は自分が訊ね出したことに慌あわてて、

「私も鳥取ではございませぬ……」

少し男の機嫌が悪いように見えたので、その話はそれなりにして、口を嚙つぐんだ。

だが、昼過ぎの仕事にも、かれの親切気は変りがない。

何かに、面倒を見通してくれた。

夕方も、

「おい、おれの分を少しやるから、勘定場へ持ってゆきねえ」

と、自分の竹篋たけべらを減らして、数の少ない左次郎の方へ足してくれる。

辛い仕事場が、左次郎には、一日ごとに楽しみになった。朝、砂利場への河岸で、男の雄大な体軀を見るのが、かれのその日を心強くする上に、なくてはならない物になった。

そんな風に、左次郎の心に少し余裕がついて来て、ちようど十日目頃。

何時も、部屋は三筋町なので、大川端から新堀を一本道に帰るのだが、親方の言伝ことづてを頼まれて、本所の同職の家へ廻り、少し遅くなつて、葉柳の闇が狭く水をつつんでいる割わりげすい下水の辺まで来ると、――

「もし……」

と低い声で、誰か呼んだ。

白粉おしろいの濃い女である。

白い手が、柳の蔭で、招いていた。

左次郎はオドオドしながら、ちようど、人通りがないので、後へ戻つた。この辺に、夜よ鷹たかが出るということや、夜鷹の相場や、夜の女の様々の戯れ話ざわは、いつも部屋の者が話すのを聞かない振りをしつつ、ある好奇心が熱心に覚えさせていた。

「ね……」

夜鷹は鼠ねずみ啼なきをして、

「ね……ちよいと」

ニツと、淫みだらな笑みを向けた。

年増らしいが、瘦やせぎすで、飢えと好奇の目には、あぎやかに美おんない女——
左次郎は、砂利を担かついでいるよりも、ひどい動悸をさせながら、

「い、いくら？ ……」

と、乾いた声で、女の方へ吸いつけられて行つたが、何かの途端に、

「あっ！」

と言うと、すべての意識を押しほり出して、一目散に逃げてしまった。

役人でも来たのかと、巻ぞえを食つて驚いた夜鷹も、それと共に手拭を唾くわえながら、ウロウロと近くの路地へ駈け込んだ。

六

どう無理工面をしたのか、銅どら鑼部屋の連中が、五両という金をそろえて腕うでぐ拱みをしてい
た。

そこへ、左次郎が帰つてくると、

「おい、待っていたんだ」

と、すぐに三公が調子づいて、

「おめえも、この頭割りに入っているんだから、そのつもりでいな」

「な、なんですか、それは」

「馬鹿に息を喘いでいるじゃねえか、どうしたんだ」

「遅くなったので、少し駆けて来たんです」

「そんな事あ、まアどつちでもいいや。此方だけ承知しといてくれねえと困るからな」

と、由造が中を割って、

「みんなの日当もおめえの手間も、七人分だけ、引ツくるめて、今夜無理に親分から前借した訳だ。金はここにある、見ておいてくれ」

「どうなさるんです、それを」

「部屋の交際だと思いいねえ」

「それは宜しゅうございますが……」

「明日から七日だけ、おれ達も、砂利場へ仕事に行くことになった。ところで三公の奴が、どうしても癩で堪らねえから、もう一度、醬油賭をするって言うんだ。それへ、みんな半肩乗った理だから、勝てば、倍になって返ってくる。その代り、取られても泣言をこぼ

「しちや困るぜ」

醬油賭の腹いせに熱している仲間の話も、かれには何の興味もない。

よい程に聞いて、蒲団をかぶった。

そして、夜具の中で、ジツと目をつぶりながら、さっきの夜鷹の顔を思い浮かべた。だがあの瞬間に強く襲われた白粉の顔も、もう種々な疑惑に掻き乱されて、纏まりもつかない印象となっていた。

「まさか！」

と、彼は無理に心を落着けようとして、

「……人違いだ、気のせいだ……いくら何でも、まさか養母が夜鷹などに」

と、心で叫んだ。

しかし、その一方では、またすぐに、

「だが、よく似ていた。白粉こそ濃く、六年前よりも若く見えただけ……」

七

とうとうその晩は、お咲のことや、安南絵の壺のことや、亡父の臨終のことなどを考え出してマンジリとも眠れなかった。

で、翌朝。

「少し、風邪を引いたあんばいですから、今日だけ一日休ませて貰います」
 亀親方に言つて、また一日みのむし 蠶 虫のようにくるまつてしまった。

ゾロゾロ部屋の者が出払つたあとで、親方の銅鑼屋の亀さんも、中風の身をおか 冒して珍しく何処かへ出て行つた。

左次郎は何にもさまた 邪げられずに、好きな事を考えていられた。もし養母のお咲が江戸にいたつて、裕福である氣遣いはなし、仲ちゅうげん 間の一平と往来で出会つても、討つ力がないことは、自分にも分つている。

と言つて、叔父の手前、申し訳ばかりにこんな事していても、なおさら自分の身が立たない。

「江戸から姿を隠して、叔父にも鳥取の者にも、一生会わないことにしよう」
 こう考えたりした。

しかし醤油賭のまきぞえを食つて、七日分の日傭賃ひようちん も親方から借出されてしまつてあ

る。当座の小遣^{こづかい}だけでも持たずには、まさか、この裸一貫で、何処へ行つて何をしようもない。

こんな引込思案は、左次郎の持前だった。

そうこうするうちに、日が暮れると、今日から砂利場へ出かけた連中がゾロゾロと帰つて来たが、みんなグンニヤリして、ろくすっぽ口数もきかない。

「おれも明日から、左次公と一緒に風邪ツびきになるよ。もう、働くのは嫌になった」

と、誰かが、たった一度、大きな声で言つたきり、みんな脚氣^{かっけ}のように足を伸ばして、湯に行こうと先に立つ者もない。

そこへ、亀親方がのつそりと帰つて来て、

「話がある、みんな、円^{まる}くなれ」

と、どっかり坐つた。

菊花石^{あばた}の顔を少し険^{けわ}しくして、電^{いなびかり}光^{かり}のように、しきりと右の眼を擧^{しか}めている様子。

お出^{いで}なすつたぜ——という風に、一同、元氣なく膝を直したが、左次郎だけは起きなかつた。空寝入りでなく、ほんとにその頃になつて、彼はやつとトロトロした風だった。

「なんですか、親方」

「てめえ達や、今日取られてきたな」

のつけに醬油賭の敗北を言いあてられて、ガンと鉄鎚てつづいを食ったように、

「へい」

と六人とも、悄気しよげた首を垂れてしまった。

「馬鹿に大人しいじゃねえか、取られてベソを搔くくらいなら博奕ばくちをするな」

「へい……怖れ入りました」

「何も怖れ入る事はねえ、ほんとだ、博奕をやるくらいな量見のくせに、取られたからつて、餌乾えぼしになったキリギリスみてえに、いやにひっそりして齒軋はぎしりを噛んでる奴があるものか」

「もう、懲こりました。口惜しくツて堪りませんが、もう諦めます」

「意気地のねえことを言うな。明日——と言っちゃ少し早いが、四、五日置いてもう一番やっつて見ろ」

「え？……」

「おれがきつと勝たしてやる」

「まったくですか親方」

みんなが息を吹つかえたように、

「じゃ親方、すみませんが、今度は、あつし達の体を抵^か当^たに、十両ばかり工面しておくんなさい。そして、野郎に嫌が応でも二升五合賭で果し合いを申込んで、こつちが飢え死するか、伝公の奴が血へドを吐くか、最後の勝負をしてやります」

「いいとも、質草入れても、十両こしらえてやる」

「有難てえ、拝みます、親方」

「だが、今までのようなやり方じや駄目だ」

「へえ？ ……やり方がありますか」

「実は今だから話すが、何でも五両貸してくれと言う様子が変だから今日てめえ達が仕事に出たあとで、おれもちよつと砂利場へ様子を見に出掛けたんだ」

「じゃ親方も、昼休みにやっていた醬油賭の様子を見ていたんで？」

「ウム、眺めていた、見事なもんだ、あれじゃ幾ら一升飲め、一升五合飲めとかかったところで、半^{はん}白^{ぱく}半^{はん}分^{ぶん}に巻き上げられてしまいうだろう」

「そうかなア」

「だが、おれも少しや、博奕で懲りている人間だし、若い時の覚えもある。あれから伝公

が、仕事を半人で切上げて、涼しい顔をして帰るのを見届けたから、奴のあとを尾けて、近所隣で少しばかり平素の行いを洗い上げて来た。それで今夜は遅く帰って来たが、その代りにや土産があるぜ……」

と言つて、銅鑼屋の亀さんはさも得意気に、顔の菊花石あばたが一粒一粒笑うようにニヤニヤとした。

それから三日ほど経つと、

「左次さん、今日は手不足だから、嫌でも仕事に出て貰いてえな」
と、亀親方も帳場支度で、朝早くから左次郎の枕元へ来ていた。

八

仕事先が二ツになるといふので、竹、六、勘、由、亀親方の五人は両国から別の方にわかれ、丑、三公、左次郎の三人だけは、何時もの砂利場へ軽子かるこに来た。

背丈せいが高いので、漆うるしかわ革の煙草入れを持ったあの親切な男の姿は、すぐ左次郎の目に映つた。

左次郎がその男に馴々しくしていると、仕事のすきに三公が、

「左次ツ、てめえ、あいつと懇意なのか」

と、不服そうに睨んだ。

何の気もなく頷いて言った。

「ええ、あんな親切な人は、見たことがありません」

「けツ、何を言つてやがるんではない！」

左次郎は蹴飛ばされるのかと思つて、飛び退いた。

本当は、部屋のと一緒に食べなければ悪いと思つたが、その事があるので、左次郎は昼飯の弁当も、久し振りの男のそばへ持つて来てムシャムシャやっていた。

すると、丑と三公が、飯を噛み噛み意気込んで来て、

「さ、伝公、二升五合賭で来い」

と、腕捲りをして前へ立つた。

「伝公ツて？ ……」

左次郎はヒョイと男の顔を盗み見た。

例の漆革の煙草入れを指に挟んで、ふーツとその面へ煙を吐いた男は、クスクスツと肩

で笑いながら、

「まあ、今日は止そうよ」

「逃げ張るねい、この間何と言った、五両賭でも十両賭でもしてやるが、砂利場中の者の金を寄せても、それだけは纏まとまるまいと吐ぬかしたろう」

「賭に遺恨なしだぜ、取られたからって吠ほえるなよ」

「な、何を吐かしゃアがる。憚はばかりながら、五両やそこらの目腐めくされ金を取ったって取られたつて、それでお天気の変る男じゃねえんだ」

「ほう……豪勢だの」

「こうなりや意地だ、てめえが血へドを吐くか、俺達が飢え死にするかだ。さ、こい！」

「いけないよ、お断りだよ」

「いけねえ？ なぜいけねえ」

「何故つて銭なしが二人ばかり、残ら肩を聳そびやかしたつて、相手になりやしねえじゃねえか。醤油賭は命がけだぜ、昼休みの番茶じゃねえんだから、二升五合賭なんて大口叩くなら、金主を見つけて出直して来い」

「こん畜生」

三公は真つ赤になつて、両手をふところに押し込んだ。

俱利迦羅紋々くりからもんもんでも見せるのかと思うと、グツと襟を割つて、

「その口を忘れるなよ、梅忠じやねえけれど、鷹にせがね金じやねえから目をつぶすな」と、亀親方から工面して貰つて来た小判十枚、伝公の前に叩きつけた。

九

左次郎は氣をのまれてウロウロした。

自分に親切な男が、醬油賭の伝公だった。

それが伝公であつたにしろ、左次郎が好意をもっていることに少しも變動はない。むしろ、三公のキザな科白せりふが小にくらしく思えた。

だが——また始まる！ とそこへワラワラ寄つてきた砂利場の軽子は、皆んな一度は伝公にせしめられている組なので、三公の梅忠もどきの啖呵たんかに手を叩いて氣勢を添える。

伝公は、口を結んで、砂利山にぬツと立った。

「よし、賭けてやる」

「てめえも見せろ、正金なまで十両、あるか」

「ふん……」

煙草入れから十両出して、

「粉だけまけてやらあ。さ、支度をして来い」

「二升八合だぞ」

退のツぴき出来ないようにしておいて、丑がそこで、また約束より三合割を掛けた。

「いいとも」

伝公は怯ひるまなかつた。

立派だ、侍が果し合をするようだ——と左次郎は感心して、かれの堂々とした体軀にみとれていた。

すぐ酒屋へ飛んで行つた者がある。升を探して来る奴がある。知らない者をワザワザ呼び立てる者がある。そんな騒ぎに、小普請こぶしん小屋の役人や、川番所の番太郎まで、何事かと、この人輪へ駈け集まる。

「おれが、よしというまで、注ついじやいけねえぞ」

伝公は少し居場所をかえて、大谷石おおやいしを二ツ重ねた上へ、悠々と腰を下ろした。

そしてしばらく大川を睨んでいた。

さすがに、この間は、弥次を言う者もなく、初めのうちは、

「無智にも程があつたもの、あんな馬鹿な真似をして、何が面白いのか」

と苦笑していた役人達の顔までが、妙に引緊ひきしまつて来て、目瞬ましろぎもしない。

「さ、注いでくれ」

言つたかと思うと、伝公の顔は、もう大きな井に隠れていた。

ガボ、ガボ、と真ツ黒な液体が腹の中へ波を打つて流れ込んで行く様は、理窟を考える

暇なく、ただ、驚きょうもく目を瞠みはらせてしまった。

「お蔭様で、また今日も半日遊ばして貰えたな。じゃ十両は貰つてゆくぜ」

と、伝公は煙草入れへ二十両の金を詰込んで、まだ呆ツ氣に取られている周りの者へ、

「あばよ」

と、人のいい顔を作つて笑つた。

伝公は世帯を持つていた。

家は浅蜷あさりの貝殻を踏みつけた高橋たかばしぎわ際の路地にあつた。

大川を向うへ越えて、渡舟わたしを上がつた途端から、伝公の挙動が少し違つて来た。どうも先刻の悠々然たる伝公とは調子が違う。

そそくさと、一本道に自分の家へ歸つて来る。

女気はあるらしいが、留守と見えて、そこらに、ふだん着の長襦袢ながじゆばんが見えるばかり。

かれは上がるとすぐに仕事着を脱ぎ捨てた。そして、引っかけ浴衣ゆかたに手拭一本ぶら下げると、大股に横町を出て、角の銭湯へ急いで来たが、戸に手を掛けて見ると、ガタツと鳴つただけで、開かない。

「おや……」

と気がついて見ると、千鳥湯という、いつも潜くぐる暖簾のれんが外してあつたので、

「あつ……休みか」

弾はじかれたように、そこを出て、次の風呂屋へ飛んで行つた。

ところが、その暖簾も仕舞つてあつて、盲目格子がシーンと閉まっている。

いなせ者が多い深川のことだ。昼や朝湯がこう休みの筈はない。かれはその裏通りの喜き

撰湯を思い出して、一目散に駈け出した。

「休みだ！」

伝公は狼狽した。

血相をかえて、風呂屋の戸をガンガンと叩きながら、何か大声で呶鳴っていたが、カラ
ンという小桶の音も聞えない。

「ちえツ」と、かれは地団太ふんで、さらに奔馬のような勢いで往来へ出た。もう思い出
す湯はこの近くに小町湯とお豊風呂の二軒しかなかった。

「やツ、休みだ！」

唾を吐きかけるようにして叫んで、次の一軒へ来てみると、ここもまた申し合せたよう
な休業札。

「今日は幾日だろう」

伝公はクラクラする頭を押えながら考えてみた。休み日じゃない！ 風呂屋の休み日に
しろ、こう揃って、何処も彼処も休みという筈がない。

それから伝公は気違いのようになって、湯屋湯屋と血眼で探して歩いたが、もう目眩と
嘔吐気に堪らなくなったらしく、両手で頭を抑えたまま、真ッ青になって、自分の家に転

げ込むや否や、

「ウーム……」

と弓弦ゆみづるを張られたように身を反そらして、柱の根元へ獅し噛がみついた。

十一

「野郎、今日ばかりは、余ッぽど慌あわてやがったようです」

蛤鍋屋はまなべやの奥で、町内の顔役が笑っていた。

「どうも、有難う存じました。お蔭様で仕返しをしてやる事が出来たというもので」

銅鑼屋の亀さん以下、四人の者が、そこで揃って礼を述べた。

今日の風呂屋の休業は、この頭かしらの口ききだった。無論それを頼み込んだのは、亀親方。

なぜ、風呂屋へ目をつけたかという点、伝公が醬油賭をした時は、きつと、半日で仕事をやめて帰る事と、すぐに必ず近くの銭湯へ行くことを聞き出したからであった。

で、その銭湯のおやじに聞くと、

「ははあ……」と頷うなずけた顔をして、

「家でも、変だ変だと言いついていたんです。何しろ伝さんが飛び込んできて、ウームと熱い湯に長いこと浸ひたっていると、あとの湯が妙によごれて、おまけにすっかり塩ツぼくなつちまうんです。——え、醬油賭をするんですつて、なるほど」

と、その効能を説いて、さらに言うには、

「蛇を食う山国の者は知っていきましょうよ。たとえば、蟒うわばみ蛇の味噌漬なんかをひどく食べすぎた時、熱い湯に入つて、ウンと忪こらえておりますと、全身の毛穴から強い精分や塩分はみんな絞り出されてしまうのです。その策てでさ。そこから思いついた芸当に違いありません。万八の大食会で一升も飲まされた人が、死んだと聞かされた時、私は江戸の人間は、案外智慧なしだと思つてましたよ」

こう聞いたので、銅鑼龜さんは、しめたと町内の顔役からほんの二刻ばかり、風呂屋総休みの交渉をやつて貰つた訳である。

——で賑やかにそこで一杯飲んでいると、

「大変です、伝公が血を吐いて、死んだそうです」

と、知らせに来たものがある。

まさか、死ぬ程のこともあるまいと思つていたので、

「えっ！」と色を変えて総立ちになった。

「死んだとなると、こいつア検死が面倒だ、とにかく、抛ほつちやおけねえ」

今さら驚いて顔役と亀親方だけが、例の浅廻あさりをザクザク踏みしめる路地の奥を訪れた。

白粉よごれのした女が、伝公の死骸にすがって泣いていた。

自業自得じごうじとくとは言いながら、気の毒にもなつて、だんだん事情を聞き取つてみると、銅鑼

屋の亀さんは吃驚びっくりした。その女が、前々話を聞いていた、左次郎の養母ははに当るお咲だつた。

すると、もしや——と思つたので、男の方を聞いてみると、醤油賭の伝公というのは、

江戸へ来てからの変名で、もとは左次郎の父に仕えていた仲間ちゆうげんの一平。

だが、一平は、醤油賭をやり始めてから、すっかり昔と体質や容貌まで変つてしまつたというから、左次郎には気がつかかなかつたものと見える。

お咲は隠しなくすべてを話した。

自分が今、割下水で、恥かしい夜鷹をして人の袖を曳いていることも。

なぜ、そうまでして、男女ふたりが金のために休まで売つたり賭けたりし始めたかというと、

それは、あの元贄げんびんやき焼の安南絵の壺を求めて、どうかして、もう一度、鳥取へ帰りたいた

いう望みが動機だった。

その代金として、最初、国元から預かって来た金は、まったく道中の誤ちで、お咲が胡麻の蠅に掏すられたのだった。仲間の一平はそれに同情して、自分の郷里へでも行って金の工面をしようとして、日を過ごすうち、遂に、的あても何もかも外はずれて、鳥取へ帰る機会を失ってしまった。

ただ稼いで、何百両という金を貯ためるのは一生かかっても難しいことと、一平が悪智わるちえ慧を出して、醬油賭をやるようになってから、お咲も、自分の体を犠に牲にしてもという気で夜鷹に身を落したが、実は、もう安南絵の壺を求めだけの金は、とつくに余るほど、貯まっていた。

だが——金の額が越えるほど貯まってくると、こんどは、一平もお咲も、急にその執しゆう着じやくが捨てられなくなった。

で、まったく、主従の隔へだてを破つて、夫婦になったのは、つい去年の事だと言う。

その話に嘘はなさそうであった。

銅鑼屋の亀さんは、何しろこの奇遇を少しでも早く左次郎の耳に入れてやろうと、その晩、滅多に乗らない町駕を飛ばして帰った。

だが、左次郎は、今日の砂利場の帳場から姿を隠したまま、どこへ行ったものか、銅鑼部屋へは帰らなかった。

青空文庫情報

底本：「治郎吉格子 名作短編集（一）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2003（平成15）年4月25日第8刷発行

初出：「改造」

1928（昭和3）年5月号

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

醤油仏

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>